研究論文

看護系大学生における自尊感情の実態

－SOBA SETを用いて－

高儀　郁美・山本　澄子・矢野　芳美・中田　真依・中澤　洋子・中村　恵子

（2015年1月5日受稿）

抄録：　本研究の目的は，看護系大学に入学した学生の自尊感情の実態を調査し，看護を担う社会人としての責務を理解し成長するための学習支援を提言することである．研究方法は自尊感情測定尺度（以下 SOBA SET：18 項目を 4 段階評定）を用いた調査研究．看護大学生に SOBA SET 用紙を配布，回収した．

SOBA SET 配布総数は 388 部で 174 名の回答を得た（有効回答率 44.8％）．分析対象内訳は，1 年生 74 名（42.5％），2 年生 24 名（13.8％），3 年生 26 名（14.9％），4 年生 50 名（28.7％）であった．SB タイプは 4 年生が 43.0％，2･3 年生は 60％台，1 年生は 70.3％であった．失敗や叱咤の体験があっても，自らの力で立ち直ると推察される．Sb タイプは，2 年生が 8.3％を呈した．周囲に「この学生なら大丈夫」と捉えさせてしまい，学生が「孤独感」に苛まされていることを見落とす可能性がある．

今後は自尊感情の発達・成長を縦断的に追跡し，教育方法の検討をしていく必要性が示唆された．

Ⅰ．緒　言

平成23年3月の「看護系大学におけるモデル・コア･カリキュラム導入に関する調査研究報告書」において看護学教育の教育課程とは，1．保健師･助産師・看護師に共通した看護学の基礎を教授する過程であること，2．看護生涯学習の出発点となる基礎能力を培う課程であること，3．創造的に開発しながら行う看護実践を学ぶ課程であること，4．人間関係形成過程を伴う体験学習が中核となる課程であること，5．教養教育が基盤に位置づけられた課程であること，これら5つの前提や基本的な考え方を踏襲しつつ，学問領域を超えて共通する「学士力」を看護学に統合させた「看護学士力」の育成を図ることを看護学教育の基盤として位置づけている[1]．平成23年3月11日，「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告書」には，ヒューマンケアの基本に関する実践能力が掲げられ，看護学士課程の早期より，人間形成の根幹となる自己を主体的に確立させていくことができる基盤を育成することが必要とされている[2]．看護学士教育では，ヒューマンケアの基本に関する知識，態度，具体的なケア行動が習得できるように人間関係を基盤とした教育の充実をおこなっている現状にある．しかし，現代の看護大学生は，SNSの普及や社会・家庭生活の変化によって他者と円滑なコミュニケーションを築く能力が未熟であることや様々な価値観をもった人間と交わる機会が乏しいという，人間関係の希薄化したなかで大人へと成長している傾向にある．塚本ら[3]は，新人看護師の早期退職に関する研究で，早期離職者は他者の言動に強い否定的影響を受けて退職へむかうこと，継続者は，看護専門職者として自律的な態度を獲得し，適切に自己を客観視し，自立した社会人としての責務を理解していることがあると報告している．実存しない関係性の中で成長・発達をしてきた学生は，現実の自己に基づいた自尊感情を十分に形成していないことが推察され，学習過程のなかで受ける

北海道文教大学人間科学部看護学科

他者からの言葉や現実の自己を客観的に受け入れることができず，また，対人に対して自己を表現することもできずに悩み，孤独な状況に陥ることが予測される．

Ⅱ．文献検討

文献検索は，医学中央雑誌Web版で原著論文を検索した．キーワードは，「看護大学生」，「自尊感情」，「自己意識」，「自己評価」，「生活体験」，「社会的スキル」，「大学教育」，「専攻への適応度」を用いた．各キーワードの検索結果は，「看護大学生＝88件」，「自己概念／自尊感情＝12,614件」，「自己意識＝273件」，「自己評価＝12,215件」，「生活体験＝222件」，「社会的スキル＝1,566件」，「大学教育＝20,382件」，「専攻への適応度＝1件」であり，「看護大学生」とのAND検索の結果は，「看護大学生と自己概念／自尊感情＝11件」，「看護大学生と自己意識＝0件」，「看護大学生と自己評価＝11件」，「看護大学生と生活体験＝2件」，「看護大学生と社会的スキル＝5件」，「看護大学生と大学教育＝228件」，「看護大学生と専攻への適応度＝1件」であった．

1. 看護系大学における大学教育について

柳井ら[4]は，2001年12月～2002年3月，国公私立大学学部1～4年生を対象に看護系大学において必要とされる教科科目・資質能力・スキルに関する調査研究をおこなっている．調査対象は無作為抽出で調査を依頼し，任意回答の質問紙調査を配布した結果，回答した学生33,432名（うち看護学部・学科生は928名）であった．看護学科でよく適応するための傾向として，「協調性」「福祉的態度」「自己表現力」「生物の関心」「共感性」の高いことが示唆されている．

また，看護学生の看護職者としての資質に関する研究では辻野ら[5]が，看護系大学1年生88名を対象に54項目で構成された無記名自記式調査をおこなった．結果，「他者理解や関係性を保つための自己理解」「科学的思考力に基づいた技能性」「他者に対する共感性」の3因子が，看護者にとって必要な資質項目として抽出されている．さらに，「他者理解や関係性を保つための自己理解」と「他者に対する共感性」の項目は，学生個々人の自己効力感や自尊感情による影響が示唆されている．

2. 看護学生の自己意識・自尊感情

看護学生の自己意識について遠藤ら[6]は，看護学生の適切な自己評価や看護の対象に対する共感を促す教育的な働きかけについて74項目の質問紙を用いて看護専門学校生を対象に無記名自記式調査をおこなった．結果，905名の回答があり，「自尊感情」の高低が「感情的豊かさ」には相関がなく，2因子は影響を及ぼさないことが明らかになった．さらに，看護学生の公的自己意識は賞賛獲得欲求および拒否回避欲求といった両極性の欲求が同時にあり，それらは強い関係にあること，公的自己意識が高いほど感情的豊かさに強く影響していることが示された．

看護学生の自律性欲求と自尊感情，学習動機づけとの関連では佐藤[7]が，看護系4年制大学生と3年制短期大学生に自律性欲求尺度，自尊感情尺度，学習動機づけ尺度を用いた質問紙調査を実施している．教育課程・学年別に分析をした結果，4年制大学では「自尊感情」および学習の「自立的動機づけ」が3年制短期大学より有意に高く，3年制短期大学では，自律性欲求の「独立」と学習の「統制的動機づけ」が有意に高いことが示された．

石原[8]は大学教員で学生相談員の兼任の立場から，授業におけるワークショップが大学生の自尊感情に及ぼす影響を検討している．ワークショップ体験前後の自尊感情尺度（RSES）の測定では，高得点ほど自尊感情が高く，年度で比較すると体験前後の主効果に有意傾向がみられるとしている．また，課題としては，孤独感を強く感じる学生への対応が課題であると述べている．

3. 看護学生の生活体験と社会的スキルについて

野崎[9]らは，看護大学生の生活体験と社会スキ

ルとの関連性で，看護大学生の社会的スキルを高める要因を検討することは社会的スキルの向上につながるとし，社会的スキル尺度を用いた研究をしている．その結果，感情処理のスキルに有意差を認め，この時期に感情表現，他者の怒りの処理，自制心など自己感情コントロール能力が身につきやすいのではないかと考察している．

Ⅲ．研究の目的と意義

本研究の目的は，看護系大学に入学した学生の自尊感情の実態を調査し，看護教育における課題を提言する．

意義は，看護大学の学生が自律的な態度や自尊感情を十分に形成し，看護を担う社会人としての責務を理解できるように，学習支援をしていくことにある．

Ⅳ．用語の概念規定

1. 自尊感情：自己に対する評価感情であり，自分自身を価値あるものとする感覚．基本的自尊感情と社会的自尊感情の2つで構成されている．

2. 自己効力感：ある行動を起こす前にその個人が感じる「遂行達成感」．自分自身がやりたいと思っていることの実現可能性に関する知識，あるいは，自分にはこのようなことがここまでできるという考え．

Ⅴ．研究方法

1. 研究デザイン：自尊感情測定尺度を使用した調査研究

2. 研究対象者：調査対象は北海道内にある看護系A大学B学部に所属する1・2・3・4年生

3. 期間：平成26年4月～6月

4. 倫理的配慮：無記名自記式アンケートとし，事前に研究への研究の目的・方法と対象者の自己決定の権利，プライバシーの権利，回答・不回答が成績・評価に影響を及ぼさないことを保障した参加協力依頼書を配布し，同意の得られた学生からの任意回答とする．

本研究は，北海道文教大学人間科学部 教育と研究に関わる倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：25012）．

5. データ収集方法：近藤卓によって開発された自尊感情測定尺度であるSocial and Basic self Esteem

表 1．SOBA SET 測定尺度

	とても そう おもう	そう おもう	そう おもわない	ぜんぜん そうおもわない
1 ほとんどの友だちに、好かれていると思います				
2 自然は大切だと思います				
3 運動は得意なほうだと思います				
4 自分は生きていていいのだ、と思います				
5 うそをつくことは、いけないことだと思います				
6 ほかの人より、頭が悪いと思います				
7 ほかの人より、運動がへただと思います				
8 悪いときには、あやまるべきだと思います				
9 なにかで失敗したとき、自分はだめだなと思います				
10 自分はこのままではいけない、と思います				
11 きまりは守るべきだと思います				
12 友だちが少ないと思います				
13 自分には、良いところも悪いところもあると思います				
14 しつけは大切だと思います				
15 ほかの人より、勉強がよくできると思います				
16 ときどき、自分はだめだなと思います				
17 健康は大切だと思います				
18 生まれてきてよかったと思います				

表 2．SOBA SET の判別法

項　目	判　別　法	
SOSE	12 点以下〔s〕	13 点以上〔S〕
BASE	12 点以下〔b〕	13 点以上〔B〕
D得点（偏位尺度項目）	17 点以下の場合，そのテストの回答者の回答は信頼できない．	

Test（以下SOBA SET）を使用する[10) 11)]（表1・2）．この尺度は，社会的自尊感情と基本的自尊感情の18項目からなる質問用紙であり，「とてもそうおもう」，「そうおもう」，「そうおもわない」，「ぜんぜんそうおもわない」の4段階で評定をするものである．

質問紙の配布は前期オリエンテーション後におこない，BOX投函による回収とする．自尊感情測定尺度使用にあたって原著者から許可を得た．

6. データ分析方法：SOBA SET質問紙計算方法に則っておこなう．

7. 自尊感情の概念構成は図1参照．

Ⅵ．結果および考察

看護学を学ぶ学生は，18歳以上の年齢にあり，青年期から成人期にあたる発達段階にある．青年期の学生は，身体的・心理的・社会的に子どもから大人への変化の時期で，さらにアイデンティティの形成と獲得という発達課題を持っている．そのため，自分自身の変化に見合った新しい適応状態を模索しながら看護という新たな学問を学び体得していかなければならない．本研究では，大学教育を受ける看護学生の自尊感情の実態を調査した結果より考察する．

SOBA SET配布総数388部で，そのうち回答返却のあった数は174部であり，有効回答率は44.8％であった．回収状況の内訳としては，1年生は約7割と良かったが，2年生と3年生は各々約3割弱になり，4年生は約5割程度となった（表3）．配布時の状況は，1，4年生が，4月のオリエンテーション後の時間を用いておこない，2，3年生には，講義終了時から休み時間にかけて研究協力への説明と配布をおこなった．しかし，講義終了後の時間では記入時間の短さがあったため，参加行動に

表 3．SOBA SET 配布および回収状況

学年	配布数	回収数	回収率
1 年生	101	74	73.3
2 年生	93	24	25.8
3 年生	100	26	26.0
4 年生	94	50	53.2
計	388	174	44.8

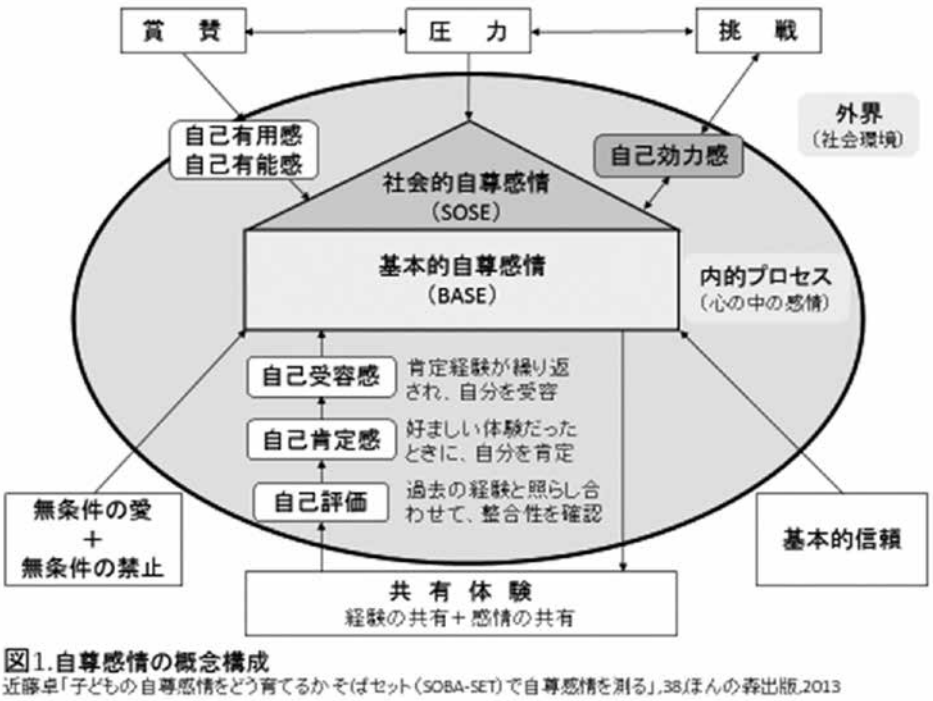

図 1．自尊感情の概念構成図

つながらず，回収率の低さになったと思われる．

自尊感情の4パターンのうちのSBタイプは，社会的自尊感情（social self esteem：以下SOSE）と基本的自尊感情（basic self esteem：以下BASE）のバランスがよく形成され安定したタイプである．SBタイプは，どの学年でも他のタイプより占める割合は多かった．失敗したり叱られたりする体験があったとしても，自らの力で立ち直ることができると推察される．1年生，2年生，3年生は6～7割を呈したが, 4年生は約4割に留まった．

sbタイプはSBタイプと正反対を示すタイプである．SOSEとBASEの2つの自尊感情が共に育っていないタイプで，このタイプは「誰の目にも気になる学生」として映るため，学生に対する周囲の協力と働きかけが早期に且つ強力におこなわれる可能性が大きいと思われる．自信なさそうな素振りや，いつもポツンと一人でいる（孤独）姿は意外に目立つ．このタイプは1年生が約4％，3年生が約8％，4年生が10％とわずかではあるが認められた．2年生は一人もいなかった．

sBタイプはSOSEが育っていないタイプで，マイペース型ののんびり屋に認められるものであるが，本調査では1年生，2年生，3年生に約3割，4年生に約1割を認めた．このタイプはやる気を起こさせるような学習課題を提示する働きかけをする必要性があり，それによって学生は自信をもつことができ，前に進むことを期待することができる．しかし，置き去りにされかねないタイプとも言える．

Sbタイプは一番要注意とされるタイプと言われる．このタイプはSOSEが肥大化しており，表面的には笑顔で誰とでも良好な関係を一見保とうとするが，内面は不安でいっぱいであり，感情の不安定化を特徴とする．叱られないように，褒められ続けようと頑張る傾向にあり，周囲も「この子なら大丈夫」と捉えてしまう．感情の不安定化を誰からも理解されず，孤独な日々を送るタイプである．本調査では4年生には一人も認められなかったが，1年生，2年生，3年生には1～2名認められた（表4）．

自尊感情を高める教育の必要性と，逆にその弊害の指摘などの論議はあり，SOSEとBASEの自尊感情は教育界にとっても重要であり取り組みが必要と思われる．Sbタイプは一見立派そうで問題のない学生と思われてしまう．表面上はお利口さんタイプと見られるであろう．その結果, 発見（気づき）が遅れ，軌道修正や本人への対応に時間的ロスを招き，修復不可能な状況に陥らないとも限らない．このタイプの学生にはBASEを育む必要がある．担任や教務委員など教員間の連携を蜜にして情報交換を図りながら早期発見，早期対応の動きが要求される．その点，SBタイプ，sBタイプはしばらく様子見の状況でよいのかもしれない．sbタイプは教育上の進行にも支障が生じる可能性も否めない．意識的に手をかけないと育たないと思われる．

本調査では一見心配のない学生が6～7割であったが，自尊感情は流動的であり，何か物事に直面したときには自尊感情の4パターンのどこに変更されていくとも限らない．また，物事を遂行する（行動する）行為も人によりさまざまである．自己効力感を意識しての行動変容への追求も学生

表 4．各タイプの学年別割合（単位：％）

学年	SB タイプ	sb タイプ	sB タイプ	Sb タイプ
1 年生	70.3	4.1	23.0	2.7
2 年生	62.5	0	29.2	8.3
3 年生	65.4	7.7	23.1	3.8
4 年生	43.0	10.0	10.0	0

の自尊感情育成に大きく関与すると考える．意識的に周囲からの声かけや状況把握，情報交換をもって対応していくことが大切と思われる．

Ⅶ．おわりに

今回の調査では4年生にSbタイプの学生はいなかった．この学年にはもともと存在しなかったのか，もしくは受けてきた教育活動によって自尊感情に変化が及んだ結果なのかは定かではない．また，各学年の回答者数にばらつきがあり，学年間の比較が困難であった．

調査法に憂慮することはなかったかを振り返り，今後の調査に反映させていきたい．また，学年の経年的変化の追跡をおこない，大学における看護学教育活動と自尊感情の発達・成長の関係を縦断的に検討しこの研究を継続的に取り組んでいきたい．

文　献

1）看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関する調査研究報告書（平成22年度先導的大学改革推進委託事業）. 文部科学省, 2011.（http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2012/04/H22ModelCoreCurriculum.pdf）.

2）大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告書（平成23年3月11日）．文部科学省，2011.（http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbk2.pdf）.

3）塚本友栄，舟島なをみ：就職後早期に退職した新人看護師の経験に関する研究－就業を継続できた看護師の経験との比較を通して－. 看護教育学研究，17（1）：22－35，2008.

4）柳井貼夫，石井秀宗：看護系大学におけて必要とされる教科科目・資質能力・スキルに関する調査研究．聖路加看護学会誌，11（1），2007.

5）辻野明美，上野範子他：看護学生の看護職者としての資質に関する研究，藍野学院紀要，19：79－88，2005.

6）遠藤順子，菅原真優美:看護学生の自己意識・自己評価と共感性の関連, 新潟青陵大学紀要，4：171－186，2004.

7）佐藤美佳：自己決定理論の視点に基づいた看護学生の自律性欲求と自尊感情，学習動機づけとの関連．八戸短期大学研究紀要，35：53－71，2012.

8）石原みちる：インプロ・ワークショップが大学生の自尊感情に及ぼす影響．山陽論叢，18：1－14，2011.

9）野崎智恵子，布佐真理子，三浦まゆみ，千田睦美：1年間の経過からみた看護大学生の社会的スキルと自己効力感，生活体験の関連．東北大医短部紀要，11（2）：237－243，2002.

10）近藤卓：自尊感情と共有体験の心理学．209，金子書房，2011.

11）近藤卓：子どもの自尊感情をどう育てるかそばセット（SOBA-SET）で自尊感情を測る．62，ほんの森出版，2013.

12）相川充，佐藤成二，佐藤容子，高山巌：社会的スキルという概念について－社会的スキルの生起過程モデルの提唱－．宮崎大学教育学部紀要　社会科学，74：1－16，1993.

A Study of Self-Esteem among Nursing College Students:

Analysis with the SOBA-SET

TAKAGI Ikumi, YAMAMOTO Sumiko, YANO Yoshimi, NAKATA Mai,
NAKAZAWA Yoko and NAKAMURA Keiko

Abstract: The objective of this study is to investigate issues related to self-esteem among nursing college students, and contribute to understanding what support arrangements would be of help for students to develop and understand the responsibilities they are expected to fulfill as members of society who are in charge of nursing. The study design is a questionnaire survey using a social and basic self-esteem test (SOBA-SET), which rates 18 items on four scales. The SOBA-SET questionnaire forms were distributed to and collected directly from the nursing college students. In total, we distributed 388 forms and collected 174 responses (44.8 %). The analysis was conducted with 74 first year (42.5 %), 24 second year (13.8 %), 26 third year (14.9 %), and 50 fourth year (28.7 %) students. The responses were classified into SB and Sb types, and 70.3% of the first year, about 60% of second and third years and 43.0 % of fourth year students were included in the SB type. This suggests that students can overcome difficulties by themselves even if they make mistakes and are scolded. However, a total of 8.3 % of the second year students were evaluated as the Sb type. This suggests that teachers may be overlooking distress arising from "feelings of isolation" felt by these students by assuming that "there is no need to worry about these students". The findings suggest the necessity to follow up the development and growth of the self-esteem of these students and also to examine educational methods.